

協力隊を育てる会ニュース

ひとりの若者の海外ボランティア活動によって、国際協力の輪が限りなく広がることを理解し、その活動を支援するために『協力隊を育てる会』は歩みつづけた

- ◆題 字：茅 誠司
- ◆発行所：一般社団法人 協力隊を育てる会
- ◆発行人：明石要一 ◆編集人：大石裕一
- ◆毎月1日発行 定価1部110円(本体100円)



2024

8

第479号

一般社団法人
協力隊を育てる会

〒101-0052
東京都千代田区神田小川町3-28-7 昇龍館ビル2階
TEL: 03-5244-5093 FAX: 03-5244-5095
E-mail: news@sojocv.or.jp

JICA海外協力隊

地域	派遣中人数	累計	地域	派遣中人数	累計
大洋州	107	4,855	東南アジア	207	8,371
北米・中南米	428	15,006	東アジア	41	1,616
中東	96	3,733	中央アジア	57	704
アフリカ	410	16,199	南アジア	78	5,411
欧州	6	720	合計	1,430	56,615

2024.6.30現在

協力隊が繋ぐ日本と南太平洋の絆 —PALM10で元隊員たちが活躍

第10回太平洋・島サミット (PALM10) は、日本と18の太平洋島しょ国・地域が参加、7月16日(火)～18日(木)にかけて都内で開催されたが、林官房長官夫妻主催の歓迎レセプション(16日)、岸田総理夫妻主催晩餐会(17日)の両日において、大洋州に派遣された10名の元隊員が参加、各国の首脳、要人らと任国の思い出に花を咲かせた。

トンガOVを代表して参加したのは、深川千幹さん(佐賀県・地球市民の会理事、佐賀県協力隊を育てる会副会長)。深川さんは、佐賀県初となる現職教員として協力隊参加。トンガから帰国後、30年以上にわたり日本の小中学校

教育に携わってきた。2022年1月に発生したトンガ沖大噴火の被害をネットニュースで目にする、地球市民の会で募金活動を展開、支援金を持参して駐日トンガ大使館に駆けつけてみれば、待っていたスカ・マンガシ大使は紛れもなく、かつてトンガの高校で教えた生徒であった。これを機に一NPOである地球市民の会(佐賀県)は、トンガ政府と異例のMOU(基本合意書)を締結、噴火からの復興支援に現在も携わっている。

PALM10には、マンガシ大使の他、トンガ政府を代表してシアオシ・ソヴァレニ・ファカヴァメイリク首相が来日したが、同首相もまた

深川さんの教え子であり、30年以上の時を経て駐日大使、首相となったかつての教え子二人と同時に再会、3人での記念撮影を果たした。

マンガシ氏は、かつて高校生だった時に試験を欠席したことがあり、心配して深川さんが自宅まで来てくれたと語り、シアオシ首相も晩餐会の場で、岸田総理に「僕の先生です」と深川さんを紹介した。



駐日大使となったスカ氏(左)、シアオシ首相(右)との記念の3ショット。立場は変わってもかつての先生と生徒の関係は変わらない。

国際協力時評

人の幸せ、生きがいの底にあるもの



結城和香子

読売新聞編集委員
(一社)協力隊を育てる会理事

〈略歴〉

1986年読売新聞入社。運動部、シドニー支局長、ロンドン支局(欧州総局)員、アテネ臨時支局支局長、運動部次長等を経て編集委員。国際オリンピック委員会(IOC)の取材を担当し、現地特派員として報じたシドニー、アテネ大会や、2020年東京大会を含め、1994年以降の夏季・冬季五輪、パラリンピックの取材が続いている。

新聞社で、2000年シドニー五輪に向けてシドニー特派員を拝命したことがある。育てる会の理事も務めた元支局長の先輩から、「大事件がなく書くことが少ないからって、精神的に落ち

込まないようにね」と温かい励ましをもらっての赴任だった。

シドニー支局の担務は豪州とニュージーランドに、南太平洋諸国と南極が加わる。印象に残るのは南太平洋の島々で、フィジーのクーデターからパプアニューギニアの津波、東ティモールなど、オリンピックが主担当だった運動部記者の想像を超える取材に、電話一本で向かったことを思い出す。

島々の多くには、戦争の爪痕とともに、協力隊の足跡があった。例えばサモアでは、退任後シニア海外ボランティアに自ら参加した、JICAの藤田公郎元総裁の取材もした。同時期サモアで教育を担当していたシニアの女性は、人々の様々な相談にも乗り、地域で暮らしていた。

振り返ってふと考える。人々はなぜ、協力隊やボランティアに参加するのだろう。様々な理

由があれど、体験談を伺っていると、共通点が一つあるように思う。人の幸せ、生きがいの底にあるのは、富や名声ではなく、自分も誰かのため、何かのために役に立てるのだと思えること——そんな小さな充足感なのだというのだ。

現在16大会目の五輪取材でパリに入っている。大会の主題の一つはスポーツを通じた社会変革だ。持続可能性や未来世代に何を残せるかに、人々が真摯に取り組んでいる。コロナ禍を経てスポーツ界は、社会のため何ができるのかを一層深く考えるようになった。参加する日本選手団のコンセプト「一歩、踏み出す勇気。」は、選手たちの姿を通じ人々の心に何かを届けたい、そんな思いから生まれたと聞く。

困難で、達成できるかも分からない目標に挑み続け、過程に小さな充足感を探す。選手たちの素顔は、協力隊のありようどこか似ている。感動を受け取った人々が贈る拍手が、心に残る最高の栄誉であることも。それがきっと、どんな挑戦に向かおうとも、私たちの生きる理由だからなのだろう。

帰国隊員支援プロジェクト募集中

(一社)協力隊を育てる会では、今年度もJICA海外協力隊の経験者を対象に、「帰国隊員支援プロジェクト」の募集を開始する。募集期間は7月1日(月)～8月31日(土)(郵送の場合は当日消印有効)。厳正な選考の上、合格者には年内に助成金を送金予定。

当会が実施する隊員への支援活動のうち、本「帰国隊員支援プロジェクト」は、帰国後の隊員が活用できる事業となっている。

派遣国での経験は、大きな価値観の転換となる。隊員として開発途上国で暮らし、そこで生きる人々とともに活動した経験を生かして、現地の人々とともに、帰国後も自費で途上国への協力活動を続けている人、国際協力に役立つ調査研究を行っている人など、地道に国際協力を続けている人に活動経費の一部を助成している。



「パプアニューギニアKAMISHIBAIプロジェクト」
(2022年度受給者/笹瀬正樹さん)

帰国隊員支援プロジェクト

財源は(公財)三菱UFJ国際財団から受けた300万円の助成金。これは当会が「協力隊を育てる会」として同財団に助成金を申請し、財団によって承認されたことによるもの。

この原資をもとに、「帰国隊員支援プロジェクト」の申請については、1件につき上限50万円を支給。帰国後の国際協力活動や国際協力に伴う調査研究等に対して行う支援で、対象は2024年7月1日現在で年齢が40歳未満の方。新型コロナウイルス感染拡大による避難一時帰国後、派遣期間満了扱いとなった帰国隊員も応募可能。

単なる留学や進学等の学費援助ではないため、どのような形・姿勢で国際協力に関わろうとしているのかが重要となる。詳しくは当会HP参照。

http://www.sojocv.or.jp/mbr_support/homecoming/youth/index.html

父・寒河江善秋が若者に託したメッセージとは？ —協力隊体験を地域社会で還元するという生き方— 愛知大学での講演録が公開

協力隊事業創設者の一人である寒河江善秋氏の四男・亮さんが、昨年10月18日に愛知大学（名古屋キャンパス）にて講演を行い、今般その講演録の全文が愛知大学国際問題研究所のホームページで公開されました。

本講演は、「知を愛し、世界へ」をスローガンとする愛知大学の学生、教職員、さらには一般市民を対象に、世界にどうかわっていくのか、共に考える機会としたものです。また、父である寒河江善秋氏の想いだけでなく、ご自身もザンビアの隊員として参加した亮さんの体験やそれを地域社会に還元する生き方についても語っています。

また、愛知大学の卒業生で隊員としてモンゴルに派遣された永井愛加さんもコメントーターとして登壇しました（下記記事）。



愛知大学発祥の地である旧陸軍豊橋士官学校司令部前にて。右から2人目が寒河江さん

父・寒河江善秋が若者に託したメッセージとは？
—協力隊体験を地域社会で還元するという生き方—

1. 自己紹介
2. 父・善秋のこと
3. 復員後の体験
4. 青年運動に身を投じる
5. 中国に招かれる
6. 青年海外協力隊発足へ
7. 私の青年海外協力隊の体験
8. ザンビアへの赴任
9. 惨憺たる初講義
10. ザンビア人青年の心中
11. 自身の協力隊体験をそれぞれの地域社会で還元するという生き方
12. 私の人生にとっての協力隊体験の意義、位置づけ
13. 川西町の魅力とは？

【愛知大学リポトリ】

<https://aichiu.repo.nii.ac.jp/records/2001150>



寒河江 亮さん

昭和58年度3次隊／写真／ザンビア

愛知大学創設者の本間喜一氏と、青年海外協力隊創設者の一人である父・寒河江善秋が同郷（山形県川西町）であることに加え、父が愛知大学発祥の地である豊橋予備士官学校で幾度も学んだという御縁から、昨年度、愛知大学国際問題研究所・佐藤元彦所長（元学長）のお誘いを受け「父・善秋が若者に託したメッセージとは—協力隊体験を地域社会で還元するという生き方—」という演題で講演をさせていただく機会を得ました。

質疑応答も含めて1時間という限られた時間でしたが、モンゴル派遣の永井愛加OV（愛知大学卒）にもコメントーターとしてご参加いただき、私たちの体験した協力隊活動の一端ではありますが多くの学生たちや市民の皆様にお伝えすることが出来ました。地元JICA中部からも小森正勝所長（当時）はじめ3名も

ご参加いただき誠に心強い思いでお話しすることができました。

前半は過酷な戦争体験と戦後の社会的価値観の激変を経て父が至った青年への願い、協力隊設立までの道のりと多くの関係者たちの苦難の日々を中心に語り、後半は私自身のザンビアでの隊員活動から得た人生のバックボーンとしての学びを一切飾ることなくお伝えしました。

何不自由ない満たされた生活を送る今の若者達にとっては、なかなか現実味を感じることは難しい発展途上国の話だったかも知れませんが、一人でも協力隊活動に興味を持ってもらいたいとの一念でお話ししました。もしご興味があれば上記に記す愛知大学国際問題研究所HPのリポトリに講演録が公開されていますので読みいただければ幸いです。

協力隊として派遣される誇りと学び、 自分自身との向き合い

永井 愛加さん（2018年度2次隊／バドミントン／モンゴル）

私自身、寒河江氏のお父様が青年海外協力隊創設者の一人であり、どのような経緯か思いでこの事業に携わられていたか存じ上げませんでした。同時に、協力隊として派遣される前に聞きたかったお話だったと強く感じました。協力隊員として派遣される隊員は、「日の丸を背負って活動をする」誇りを持つことはもちろん、やり遂げる覚悟や信念をもてる人、また現地の人々からすれば、「私たちが行う行動＝日本人」と映ることを理解しておくべきなのではないかと考えます。

これまで派遣されてきた先輩方の意志を継ぎ、長い時間を経て活動を継承していけることが協力隊の醍醐味ではないかと思っています。実際に私がモンゴルに赴任した際には、幼いころ隊員からバドミントンを教わり、今では指導者として活躍している方もいました。

寒河江氏が派遣されていた時代と私の時代では世界情勢も国の貧困さも異なり、同じ協力隊ではあるものの全く異なる世界で活動されていたのだと感じました。しかし国や時代が違えども、隊員としての苦労や協力隊ならではのエピソードを共有できていることも実感し、自分が協力隊の一員であることを改めて嬉しく感じた次第です。

幼い頃、テレビで国境なき医師団を見て、私は海外で誰かのために働きたいという強い思いを抱きました。しかし私には医療の知識がなく、諦めていた時に母が青年海外協力隊のことを教えてくれました。実際に応募をするきっかけとなったのは、教員採用試験に落ち、講師として働くか悩んでいた時に電車の広告が目飛び込んできた時のことです。私は小学校3年生から

大学生までバドミントンを行っていたのですが、スポーツ分野の職種があることを知り、「今しかないんじゃないか!」と思い切って応募しました。

大学卒業の年の夏に二本松訓練所入所を控えており、それまで私はアルバイトをしていました。協力隊に合格したとは言え、周りの友達は新社会人として働いている姿がキラキラして見え、自分が劣等感を感じたことを覚えています。また、本当に協力隊に行く道でよかったのかと悩むこともありましたが、そんな時、友達から「今から海外に行ってまた新しい挑戦ができる、もう一度学べるなんて羨ましい!そして大きく成長して帰ってくるんでしょ!」と言われました。あんな風に考えている人がいるのに、私が劣等感を抱くのは失礼だと思い、私が決めた道、夢に堂々と向き合おうと自分を奮い立たせ訓練所に入所しました。

2018年10月、首都ウランバートルにて中学校3校でのバドミントン指導を行い、モンゴルでのバドミントン普及活動がスタートしたものの、一緒に活動予定の現地のバドミントン指導者（カウンターパート）はあまり協力的ではなく、途中から来なくなってしまいました。最後まで良い関係が作れず、結局他の方に代わることとなりました。意思疎通ができなかったことが悔しく、何がいけなかったのか冷静に考えたとき、私は指導者として来ていることに拘りすぎて、「指導しなきゃ!」が先行し過ぎていたことを理解しました。改めてモンゴルの文化や人々の考え方に寄り添ってみようと思い、いろいろな人に話を聞きました。そうした中で、モンゴル人は実力主義なところがあると聞き、私のバドミント

ンのレベルがわからないから周りも聞く耳を持たないのかと考え、バドミントンのモンゴル全国大会への出場を果たし、女子ダブルス優勝、ミックス（男女混合ダブルス）優勝を果たしました。この試合をきっかけに、知名度が上がり、地方のバドミントン指導の出張やモンゴル代表選手の強化合宿にも呼んでいただける機会に恵まれました。また、新しいカウンターパートは練習内容から私の意向を取り入れてくれ、さらに一緒に練習を作っていくといった前向きな姿勢で向き合ってくれました。公私共に相談もできる仲になったことは一生の宝ですし、私自身もモンゴルと向き合えた結果かなと感じています。

今、学生である後輩の皆さんには、どんな小さなことでもやってみることを強くお勧めします。そして、特に難しいことを実際にやって欲しいと思います。たとえ結果がでなくても、トライした道が大事で、悔しい思いをすることが次の力になると思っています。そして、もし海外へ行く機会があるときには、頭の片隅でいいので日本代表として行動することを心がけてみてください。私の行動がイコール日本人、となることが多くあります。日本人としての誇りを持って行動することができれば、自分たちの文化や考え方だけでなく相手の文化や考え方を尊重できるのではないかと思います。



派遣先のウランバートルの小学校で、バドミントンを初めて行う子供達にラケットの持ち方を教える。



細く長くケニアの支援を続けています

ながい はるを
永井 春奈さん

「アフリカ雑貨マチャコス」経営
平成26年度1次隊/コミュニティ開発/ケニア

2014年にケニアに青年海外協力隊として赴任。紆余曲折を経て、普段は会社員をしながら休日はケニアで作った商品を「アフリカ雑貨マチャコス」という店名でイベントを中心に販売。仕事をしたい人に仕事がある社会を目指して奮闘中。

アフリカ雑貨 MACHAKOS

詳細はこちら！
<https://www.facebook.com/africazakkamachakos/>



2年間は長いようであつという間であり、多くの隊員が協力隊時代にかけがえのない体験をし、帰国後、その活動をどのように続けていけばいいの悩むと思います。私も派遣国のケニアに今後も関わって生きていきたいと強く思い、任期を満了しました。帰国後、試行錯誤を繰り返して、普段は会社員として働き、休日はケニアで立ち上げたNGOの活動をするというスタイルに落ち着きました。縁あってこの記事を読んだ方で同じような悩みを持っている方は、私の選んだ方法も参考にしてみてください。

私は2014年にケニアに派遣され、最終的な活動は「障がい者コミュニティの収入向上支援」に行きつきました。誤解を恐れずに申しますと、私は「無償の支援」というものを支持していません。もちろん、特別な事情がある方へは無償の支援も必要ですが、対象を広げ、誰にでも

無料でモノ・サービスを与えてしまうと、長期的な視点で見ればその人の生きていく力を奪うことになってしまうと考えるからです。そのため、良い仕事をした対価として賃金を得て、その賃金から子供の学費を工面する、というサイクルを生み出したいと強く思っていました。

私は、現地で志を共にするカウンターパートを見つけ、現金収入の少ない方々が仕事を通して現金収入を得ることを理念に、障がい者グループの収入向上支援を行いました。協働した障がい者グループは手先が器用な方が多かったため、アフリカの布を使ってシュシュ、巾着、ポーチを作成してもらい、私が販売を担当する仕組みを構築しました。任期中にそれなりの品質のものを創れる仕組みは構築したものの、帰国後にこの活動をどこまで続けていくのか決められ



帰国から2年後には、ケニアのカウンターパートが運営する職業訓練校に依頼だった革製品のミンを導入した。



イベントでの雑貨販売の様子。協力隊に興味を持つ学生も少なくない。活動を手伝ってくれた友人も今、隊員として赴任している。

ないまま、任期が終了し日本に帰国することになりました。

帰国後、日本での販売活動を通して、現状の品質で私の日本での生活を支えるほどの売り上げにつなげるのは難しいという結論に至りました。しかし生産者を養って品質を向上して日本で販売するのも、自分の活動理念にそぐわないと思いました。長い時間を経て、日本で普段は会社員として働き、休日は活動の続きを行うスタイルに落ち着きました。自分の生活基盤が堅牢であることでケニアでの活動に心の余裕が生まれています。

今や共に奮闘したケニアのカウンターパートはNGOのダイレクターになり、2023年に設立した職業訓練校を運営しています。職業訓練校は4つのコースを提供しており、現在は20人の生徒が受講しています。我々の売上は全て職業訓練校の運営や商品の買い付けに使用しています。少しでも多くのケニア人が仕事を通して現金を得られる日が来ることを願い、細く長く活動を続けていきます。

「JICAボランティア事業の目標と達成のための方策」を提示

「新しい時代の協力隊事業のあり方」有識者懇談会の提言(2020年9月)をふまえ、JICAでは「未来をつくる協力隊連絡会」を設置、有識者より助言をいただき、JICAボランティア事業の新たな取り組みを進めてきました。

2022年1月から2024年3月にわたり、有識者による懇談会を計4回実施、その中で「外部に対しても事業の方向性や全体像を示すことが重要」との指摘をふまえ、JICAでは「JICAボランティア事業の目標と達成のための方策」をホームページで公開しました。

これによれば、JICAボランティアはこれまでと変わることなく、(1)開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与(2)異文化社会

における相互理解の深化と共生(3)ボランティア経験の社会還元を事業の目的としています。また、「途上国・日本社会双方の課題解決に貢献し、自らの成長にもつながるというJICAボランティア事業の再ブランディングを進める。ボランティア経験の社会還元により、日本の地域社会が直面する今日的課題への対応(地方創生、外国人材受入支援・多文化共生社会構築)を促進する。」という目標を掲げています。

詳細については、JICAホームページ参照

「JICAボランティア事業の目標と達成のための方策」

https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/report/pdf/houkokusho_03.pdf



末森満さんを偲ぶ会

—約250名がお別れに参列

7月21日(日)、JICA緒方研究所(JICA市ヶ谷ビル)において、「末森満さんを偲ぶ会」が開催、約250名が末森さんのお別れに駆けつけた。

末森氏は宮崎県出身。1976年にJICA入職後、38年にわたり広報課長、人間開発部長等歴任。JICAとJBIC(国際協力銀行)の統合業務を進め、新JICA発足時には理事長室長として、初代理事長の緒方貞子氏を支えてきた。

「新しい時代の協力隊事業のあり方」「未来をつくる協力隊連絡会」有識者の一員でもあったが昨年末より病を患い、今年3月30日に逝去(72歳)。偲ぶ会では「誰よりもJICAとJICAの職員を愛し」「誰よりもJICAとその関係者から慕われた」と紹介された。

第2の人生は志を生きる！

市民のための社会起業・政策学校一新塾

1994年大前研一創設。社会起業家340名、国会議員13名、首長20名、地方議員220名。

「社会起業・政策提言・市民活動」講師29人



雄谷良成
社会福祉法人「佛子園」理事長



湯浅 誠
NPO法人むすび理事長
東京大学特任教授



熊谷俊人
千葉県知事
一新塾OB



澤谷浩介
(株)日本総合研究所
調査部 主任研究員



市来広一郎
(株)machimori代表
一新塾OB



久保田后子
前宇都宮市長
一新塾OG



宮治勇輔
(株)みやじ代表
一新塾OB



伊勢崎賢治
元国連職員
東京外国語大学大学院教授

(塾生募集)11月開講

東京・大阪・名古屋
(通信科オンラインも有)



代表理事の
森嶋伸夫にて
お話しします！

体験セミナー&説明会
リアルとオンラインで開催中
HPよりお申込み下さい。

帰国隊員等
教育訓練手当の対象
となることもあります。

ひとに健康を、まちに元気を。

大切な人と笑顔で、長く幸せな毎日を送っていただきたい。

明治安田生命は、日本で一番最初に生まれた生命保険会社として、約150年ものあいだ、人の命に、人生に、寄り添ってきました。

「確かな安心を、いつまでも」

目まぐるしく変化する世の中でも相互会社らしくお客さまを想い、その使命を追い求め続けたからこそ、見えてきたものがあります。

もっと、健康やかになっていただくために
いざという時はもちろん、「その後」も、さらには「そのずっと前」から、サポートする。

もっと、誰もが暮らしやすい地域にするために
まちは賑わい、人と人、人と地域を、つないでいく。

もっと、大きなチカラにするために
リーグ、J.LPGAなど、同じ志を持った仲間たちと
手をつなぎ、バスをつなぎながら地域独自の課題をも解決していく。

もっと、もっと。

笑顔あふれるやさしい世界を、つくりたい。
希望に満ちた社会を、未来のこどもたちへつないでいきたい。

日本で一番長く、相互扶助の絆を育んできた私たちなら
あなたと一緒に、そんな未来をつくることができると信じて。

だから明治安田生命は、生命保険会社の役割を超えていく。

明治安田生命から、明治安田へ。



NPO法人一新塾 <https://isshinjuku.com> 東京都港区芝3-28-2 カスターニ芝ビル2階
TEL 03(5765)2223 E-mail iss@isshinjuku.com

日本も元気にする青年海外協力隊OB会 ⑥9

それぞれの味を引き出せる小粒でありタイ!

新潟県
新潟市やまだ のりお
山田 規央さん西新潟中央病院 理学療法士
平成18年度1次隊 / 理学療法士 / タイ

1998-2006 国立療養所西新潟中央病院

2006-2008 青年海外協力隊

2009-現在 国立病院機構西新潟中央病院

2009-2012 新潟医療福祉大学大学院 (修士課程修了)

「今日からお前は“ブリックタイ”(胡椒)だ」
18年前、任国赴任直後のホームステイ先でタイ
ネームを命名されました。かつて、小柄だった
私に父親がよく「山椒は小粒でもピリリと辛い」
と言ってくれたことを思い出しました。

任期を終えて生まれ育った新潟市に帰郷後、
職場の同僚らと参加していた市主催のマラソン
大会で、車いす利用者は参加できないことが気
になりました。調べてみると、車いすで参加で
きる大会は全国的にも少なく、新潟県内ではほ
ぼゼロでした。一市民として「車いす参加の実
現を!」と事務局に声をあげてみたものの、「検
討します」の答えだけで状況は不変。

その後、同じ考えを共有する当事者、同業者、
市議員、専門家らの協力も得て、7年を要し
て念願の新種目「ユニバーサルラン」が2022年
に創設されました。車いすや歩行器の利用者ら

を含めベビーから高齢者までがフルマラソンと
並走して励まし合う光景は、まさにスポーツを
通じた地域共生へのメッセージであると、大会
運営に関わりながら感じます。

2015年、帰国以来途切れかけていたタイとの
ご縁が復活。翌年から年1回(1~2週間・2名)
タイの大学から理学療法士や学生の臨床研修を
勤務先で受け入れています。コロナ禍の3年間
は交流が途絶えましたが、昨年より受入れを再
開しました。私は研修担当として病院内外の連
携をコーディネートし、留学生と患者・職員との



ユニバーサルランのサポート活動



今年5月にタイから研修に来た理学療法士学生のビーコーさん(前列左)とフィアムさん(同右)

国際交流を進めてきました。並行して、海外か
らの患者受け入れや在留外国人の受診・入院に
対応する必要性から、2018年に「院内国際化
推進チーム」(GLOBAL Team)を多職種で結
成し、これまでに職員の名札や各部署の表札の
英語併記化、やさしい日本語の啓発など様々な
活動を続けています。

これからも、自分のいる地域や組織の中で共
生に向けてできることを“にいがたおたがい”
ismで考え実践し、共に歩む人たちがそれぞれの
味を引き出せる小粒でありタイ!

日本も元気にする青年海外協力隊OB会

日本でも貢献したい協力隊OBOG有志で2015年に結成。協力
隊の経験やネットワークを活かし、互いの情報交換を行いなが
ら地域づくり等の社会貢献活動に取り組んでいる。

★今回は福島県で活躍する関元弘さんを紹介しします。

11カ国18名のアスリートが
パリオリンピック・
パラリンピックに出場

パリオリンピック(7月26日~8月11日)、同
パラリンピック(8月28日~9月8日)が開催、

パリ五輪・出場予定選手・日本人指導者(JICA海外協力隊)

競技・種目	国	代表選手名	指導者(協力隊員)氏名
柔道	女子70kg以下級	マダガスカル Laura RASOANAIVO	岩根 隆幸(OB)
	女子78kg以上級	チュニジア Sarra MZOUGUI	森 太雅
	女子48kg以下級	チュニジア Oumaima BEDIQUI	
	男子60kg級	エジプト Youssef SAMY	門田 優吾
	男子81kg級	エジプト Abdelrahman ABDELGHANY	
	女子48kg級	パラグアイ Gabriela NARVAEZ	藤本 大晴
卓球	女子シングルス	バヌアツ Priscilla TOMMY	高嶋 諭史
レスリング	男子レスリング	サモア Gaku AKAZAWA	阿部 侑太
陸上	女子マラソン	ソロモン Sharon FIRISUA	藤山 直行(OB)
バドミントン	女子シングルス	ペルー Inés CASTILLO	岩本 正和

今大会でも多くのJICA海外協力隊員(OVを含む)が指導したアスリートが出場予定です。

JICAではこれまでに約5千名の体育・スポーツ分野の隊員を派遣、競技だけでなく、スポーツを通じた人材育成、障害者や女性の社会参画促進、難民支援、女性の地位向上、民族融和等の面からも関わっています。隊員と共に成長したアスリートの活躍にご期待ください。

パリ・パラリンピック出場予定選手・日本人指導者(JICA海外協力隊)

競技・種目	国	代表選手名	指導者(協力隊員)氏名
柔道	男子柔道60kg以下級	インド Kapil Parmar	長尾 宗馬
	女子柔道48kg以下級	インド Kokila	
卓球	男子パラ卓球	チリ Pilar Jauregui Cancino	横川 信子
	女子パラバドミントン	ペルー Maximiliano RODRIGUEZ	
バドミントン	女子パラバドミントン	ペルー Giuliana Poveda Flores	岩本 正和
	女子パラバドミントン	ペルー Rubi Fernandez	
水泳	男子パラ水泳	マレーシア Muhammad Imaan Aiman Bin Muhammad Redzuan	峰村 史世(OG)
	男子パラ水泳	マレーシア Muhammad Nur Syaiful Zulkafli	

日本も元気にする青年海外協力隊OB会
リレー寄稿スピノフ企画

記事の裏側お話しします

リレー寄稿の執筆者が記事には書ききれなかった想いや裏側についてお話しするオンライントークイベントを開催します。

今回は、理学療法士として病院の国際化を推進するとともに、車いすでも参加できる市民マラソンを実現させた山田さんに登場いただきます。

- スピーカー：山田規央さん(上記記事)
- 日時：2024年8月27日(火) 19:30~
- 会場：オンライン(Zoom) ●参加無料
- 申込：以下のURLよりお申込みください。

<https://forms.gle/uo7FCxqe5WKwLTPq9>

🐦 ありがとうございます 🐦
(6月16日~7月15日)

【ご入会】

武下 倭二 様



◆新刊のお知らせ

JICA海外協力隊から社会起業家へ
共感で社会を変える

GLOCAL INNOVATORS



東京都千代田区から
誰もが暮らしやすい社会を目指す
「外国人支援を行う
全国からの相談に対応」

▶新堀みどりさん
(ルーマニア / 青少年活動 / 1998年度3次隊)
NPO法人市民活動中心(CINGA) コーディネーター



アジアから下肢障害者の
生活を支える
「世界初の3Dプリント義足」

▶徳島 孝さん
(フィリピン / デザイン / 2012年度1次隊)
インスタム株式会社 代表



大分県竹田市から始まる
インクルーシブな社会
「誰もが居心地よく過ごせる
多世代・多文化交流拠点」

▶奥 結香さん
(マレーシア / 障害児・者支援 / 2014年度2次隊)
NPO法人Teto Company 理事長



ウガンダから
アフリカの水問題解決へ
「井戸の水管理システムを
開発・普及」

▶坪井 彩さん
(ウガンダ / コミュニティ開発 / 2017年度3次隊)
株式会社Sunda Technology Global 代表取締役

東京都足立区から
“選択格差”の是正を目指す
「生活困窮家庭に向け
食材配達をツールに
居場所と情報を提供」

▶栗野泰成さん
(エチオピア / 体育 / 2014年度2次隊)
一般社団法人チヨイふる 代表理事



福岡県から農業を通じた多文化共生
「インドネシアの若者の
未来を育て、日本の農業の
未来の土台づくりを」

▶田谷 徹さん
(インドネシア / 食作物・稲作 / 1997年度2次隊)
株式会社農園たや 代表



編著者：独立行政法人国際協力機構(JICA)
青年海外協力隊事務局長 橋 秀治
発売日：2024年7月完成、9月1日全国書店販売、
10月1日各種電子書籍販売開始
価 格：1600円+税
編集協力：協力隊を育てる会(クロスロード編集室)
発行所：株式会社文芸社
文芸社問い合わせ：promotion@bungeisha.co.jp